都道府県別賞一等

大丈夫を支える保険

愛知県　名古屋市立東星中学校　三学年

原　颯一郎

二〇二二年、私が小学五年生になる年に、父の実家の隣に我が家は一軒家を新築した。それまでのマンション四人暮らしから、引っ越しにより隣家に住む祖父母や叔父が加わり、家族七人のとてもにぎやかな生活が始まった。両親が仕事で不在の時は、隣の祖父母の家へおやつを食べに行ったり、休日は二世帯で一緒に夕食を食べに行ったり、祖父母が常に隣にいる生活が当たり前になっていた。

しかし二〇二五年、祖父が大腸ガンになったことで日常は一変した。ガンという言葉の重みと、先行きの見えない不安が家族を包んだ。その時、祖父が「ガン保険に入っているから大丈夫。」と冗談めかして言った。その一言は、少し家族の雰囲気を和ませた。実際、高額な治療費や個室代は保険でカバーされ、祖父は費用を気にすることなく必要な治療に専念できたと聞いた。幸い早期発見だったこともあり、全快して隣の家に戻ってきてくれて、今では元のにぎやかな暮らしが続いている。

生命保険はお金の支えだけでなく、患者や家族の不安を和らげ、心を支えてくれるものなのだと私は身をもって知った。

この経験を機に、私は両親に我が家の生活設計について詳しく話を聞いた。私は将来、当然のように両親と同様に大学へ進学するものだと思っていた。しかし、調べてみると中学三年生の今から大学を卒業するまでに、千万円以上のお金がかかることが分かった。大きな金額に驚く私に、父が教えてくれた。『こども保険』に入っているから大丈夫。やりたいことをやればいいよ。」と。さらに、父に万が一のことがあっても、生命保険に加えて、住宅ローンの返済免除（団体信用生命保険）が組み込まれているという。当たり前の日常の裏には、私の未来を守るために、保険という目に見えない支えがあったのだ。

実は私は、将来の自立に向けて株式投資に関心を持ち、親の協力も得てお年玉などを少しずつ株式投資にあてている。これからは資産運用によって、自分で未来に備えることが大切だと考えていたからだ。しかし今回の保険についての勉強を通じて、私は投資と保険の決定的な違いに気付かされた。

投資や預貯金は、目標額に達するまでに、長い時間を必要とする。もし明日、親に不測の事態が起きれば、投資だけでは私の進学や新築の我が家を守り切れない。一方で生命保険は、契約したその日から大きな保障が機能する。投資が

〝時間をかけて未来を切りひらく攻めのお金〟だとするのなら、保険は〝不測のリスクから即座に日常を守るお金〟なのだ。

さらに調べると、保険会社は集めた保険料を株式や債券で運用し、金融機関として国の経済活動を裏から支えているという。誰かのために支払う保険料が循環し、経済を潤し、万が一の時は「相互扶助」の精神で誰かを救う。生命保険は、社会全体をつなぐ信頼のきずななのだ。

あと三年で、私は十八歳の成人を迎える。将来は家族を持ち、自分の家を建てて暮らしたい。その時は投資で未来をひらきつつ、生命保険で家族を守る安心も備えておきたい。祖父の「大丈夫」という一言が家族を支えたように、私もいつか、大切な人に「大丈夫」と言える備えを持てる大人になりたい。私にとって保険とは、家族の未来を支える、かけがえのない「大丈夫」なのだ。